

2017年における主要国の 生乳生産量予測

米国農務省（USDA）は12月16日、2017年における世界の生乳生産量が、統計開始以来、初めて5億トンを上回るという予測結果を発表した。また、EU、米国、ニュージーランド、アルゼンチン、豪州など主要輸出国もそろって増産の見込みである。

初めての生乳生産量5億トン超え

USDAの予測結果によると、2017年の生乳生産量は、全世界では5億280万トン（前年比1.7%増）に達する。世界の生乳生産量は、近年順調に増加してきたが、5億トンを上回るのは初めてのことであるという（図参照）。

また、EU、米国、ニュージーランド、アルゼンチン、豪州などでの生乳生産量が軒並み前年を上回ることから、主要輸出国の生産量は前年比1.1%増となる見込みである（表参照）。なお、わが国の生乳生産量は、前年比0.3%減の740万トンと予測されている。

EUの状況

2016年の生乳生産量は、1月から5月まで前年を上回って推移したが、低乳価のもとで酪農家所得が減少したため、下半期は前年実績を下回った。とくに7月の平均乳価は前年の乳価水準より約10%も下がっており、これに伴い9月の生乳生産量は前年に比べて2%以上減少した。

EU委員会は、著しい供給過剰に伴う収益性の悪化を受けて、生乳出荷削減奨励など総額5億ユーロの支援策を実施した。その結果、2016年の生乳生産量は前年を1.2%上回る1億5,250万トンと見込まれている。

2017年後半は、乳価が19%程度上昇する見込みであるものの、乳用牛飼養頭数は15万頭近く減少すると見込まれている。しかし、1頭当たり乳量の増加で飼養頭数の減少が相殺され、生乳生産量は前年を0.3%上回ると予測される。

なお、この増加分はチーズや全脂粉乳の生産に向けられるとみられ、バターや脱脂粉乳の生産量は減少すると見込まれる。また、近年拡大傾向にある飲用乳（主に超高温殺菌牛乳）の輸出は、中国向けを中心に引き続き堅調に推移し、2016年は95万トン、2017年には100万トンに達すると見込まれている。

米国の状況

2016年の生乳生産量は、前年比1.8%増の9,634万トンと見込まれている。この要因としては、乳価の上昇、飼料穀物価格および牛肉価格の低下に加え、カリフォルニアの干ばつが緩和したことが挙げられる。

2017年の生乳生産量は、乳用牛飼養頭数と1頭当たり乳量がともに増加することから、前年比2.1%増の9,834万と予測されている。

ニュージーランドの状況

2016年は、乳価の低迷を受け、酪農家による乳牛の淘汰が進み、またコストを削減するため補助飼料の使用が抑制された。このため、乳用経産牛の飼養頭数と



資料：USDA, Foreign Agricultural Service

主要輸出国における生乳生産量の推移

単位：千トン、%

	2015年 (実績)	2016年		2017年	
		(見込)	(前年比)	(予測)	(前年比)
EU-28	150,200	152,000	101.2	152,500	100.3
米国	94,620	96,343	101.8	98,339	102.1
ニュージーランド	21,582	21,370	99.0	21,600	101.1
アルゼンチン	11,552	10,397	90.0	10,605	102.0
オーストラリア	9,800	9,200	93.9	9,500	103.3
主要輸出国計	287,754	289,310	100.5	292,544	101.1

資料：USDA, Foreign Agricultural Service

1頭当たりの乳量が減少し、生乳生産量は前年を1.0%下回る2,137万トンと見込まれている。

ニュージーランド産生乳の約90%を処理すると言われているフォンテラが、乳価を引き上げるとみられることから、2017年の見通しは明るい。乳用牛の飼養頭数は前年を1%下回るものの、酪農家は泌乳能力の高い乳用牛を保有するとともに、給与飼料と牧草地を改善するとみられる。2年間にわたり経営赤字が続いており、酪農家は増頭ではなく、債務の返済を優先するものとみられる。この結果、2017年の生乳生産量は、前年を1.1%上回る2,160万トンと予測されている。

アルゼンチンの状況

2016年の生乳生産量は、広範囲での洪水と低乳価にもかかわらず、前回予測より4%多い1,040万トンの見込みである。しかし、これは2009年以来的の最低水準である。予想を超えるエル・ニーニョ現象により、主要酪農地域の広範囲が洪水に見舞われ、牧草地が冠水し、生乳の輸送にも影響が出た。また、30%という大幅なインフレを受け、生産コスト削減のため、牧草主体の飼料体系に転換したことにより乳量の伸びが抑制された。

しかし、国際乳製品価格の上昇に伴う2016年下半期の国内乳価の上昇により、2017年の見通しは明るい。乳用牛の飼養頭数は5%程度減少するものの、生乳生産量は前年比2.0%増の1,061万トンと予測されている。しかし、これは2011年から2015年までの平均生乳生産量1,150万トンを大きく下回っている。

オーストラリアの状況

2016年は、下半期の天候が生乳生産に理想的であったことにより、東部で発生していた干ばつの影響は緩和され、牧草地の状態、土壌中の水分や貯水量が改善した。しかし、乳価の低下に伴って収益性が悪化する中、経産牛枝肉価格は堅調に推移していることから、酪農家による乳用牛の淘汰が進んだ。2016年の乳用牛飼養頭数は4%減少するとみられている。結果として、生乳生産量は前年を6.1%下回る920万トンと見込まれている。

しかし、最近の国際乳製品価格の上昇により、酪農家の収益性が改善していることから、2017年の見通しは明るい。これに加えて、酪農構造改革により生産効率が向上している。具体的には、経産牛の平均飼養頭数は260頭、酪農家上位10%の経産牛飼養頭数は600頭以上となり、酪農家上位20%の生乳生産量は全体の80%を占めている。2017年、とくに下半期の気候が例年通りに推移した場合、生乳生産量は前年比3.3%増の950万トンと予測されている。

中国の状況

乳価の低迷が酪農経営に深刻な打撃を与えてお

り、2016年には約50%の酪農家が赤字を計上する見込みである。また、多くの小規模酪農家が廃業に追い込まれているようである。この結果、乳用経産牛飼養頭数は800万頭に減少し、大規模で効率的な経営への集約化が進展しているようである。2016年の生乳生産量は、前年比4.9%減の3,570万トンと見込まれている。

2017年は、輸入の飲用乳および乳製品の消費量が堅調に推移する一方、国産の牛乳・乳製品需要は横ばいで推移すると見込まれている。乳用経産牛飼養頭数は前年比6%減の750万頭となり、生乳生産量は前年比2.0%減の3,500万トンと予測されている。乳用経産牛飼養頭数が減少する一方、個体乳量は前年比5%増加し、経産牛1頭当たり生乳生産量は4.7トンになる見込みである。

なお、超高温殺菌牛乳を主とする飲用乳の輸入量は増加傾向で推移しており、2016年1月から10月までの輸入量は前年比51%増の524,000トンであった。輸入先国は、最大のEUが66%、続いてニュージーランドが20%を占めている。2017年の飲用乳輸入量は、前年比38%増の80万トンに達するとみられている。

このように旺盛な消費需要の背景には、輸入超高温殺菌牛乳の国産牛乳に対する価格優位性、過去の食品スキャンダルに伴う消費者の輸入品指向、常温保存可能な輸入超高温殺菌牛乳が有する都市部消費者にとっての利便性という3つの要因がある。

ロシアの状況

2017年の生乳生産量は、減少傾向で推移すると予測されている。2014年8月以降の西側諸国からの乳製品輸入禁止措置にもかかわらず、収益性の悪化と投資の欠如により、生乳生産は低迷している。また、実質可処分所得水準の低下に伴い、消費者の牛乳・乳製品に対する消費需要は抑制的である。

2017年には、国際的な乳価の上昇により、国内の乳価も上昇する見込みだが、それでも生産コストと比べて低い水準にとどまる。生乳生産量の半分を占める小規模酪農家の廃業が相次ぐことから、乳用経産牛飼養頭数は前年比3%減と見込まれている。

しかし、小規模で非効率な酪農家が淘汰され、商業的酪農家が乳価上昇の下で生産量の増加を目指して遺伝的能力の改善や高栄養飼料の使用を進めるため、乳用経産牛1頭当たりの乳量は3%近く増加すると見込まれている。とはいえ、2016年における1頭当たり乳量は4トンで、10トン以上の米国を大幅に下回る水準である。主に遺伝的能力の改善による増産を実現するには、現状の経済・資本環境の下では相当なリスクを伴う資本投資が必要になるだろう。